

父権制社会と女性の「沈黙」

—シェイクスピア劇のヒロインたちをとおして—

濱田 あやの

はじめに

16～17世紀、父権制社会の英国では、女性の美徳の1つとして「沈黙」が提唱された。沈黙は「従順」「貞節」とともに女性の三美徳とされ、男性に口応えせず逆らわずに従う貞節な女性が理想の女性像として掲げられてた。

ヘンリー八世の長女、メアリー一世の少女時代に家庭教師を務めたスペインの人文学者ヴィヴェス (Juan Luis Vives) も、その著書『キリスト教徒の女性の教育』(*De institutione feminae Christianae*: 1523) のなかで、貞節を女性の最大の美徳とし、それに付随する美徳として沈黙を挙げている¹⁾。また、結婚に関する説教や行儀作法、美徳についての指導書としての役割を果たした当時のコンダクトブックの多くにも、女性は沈黙すべきとされている²⁾。

本論文は2008年、神奈川大学英語英文学会10周年記念論文大会にて優秀賞を受賞したものに加筆修正を加えたものである。本論文を読み、学術的なご助言を下さった神奈川大学石井美樹子教授に深く感謝したい。

1) Juan Luis Vives, *The Education of a Christian Woman: A Sixteenth-Century Manual*, ed. and trans. by Charles Fantazzi (Chicago: The University of Chicago Press, 2000).

2) コンダクトブックとは、説教や祈禱文、訓話などの宗教的なものから教育書や行儀作法書、風刺文や弁明文などを含む。Kate Aughterson ed., *Renaissance Woman: a Sourcebook: Constructions of Femininity in England* (London: Routledge, 1995), p. 67を参照。

当時の父権制社会の規範を反映し、沈黙は女性の美德であり、それは同時に、男性権威を守るために必要なものとみなされた。つまり、女性を黙らせ服従させることは男性優位の社会秩序を保つために不可欠だったのだ。

シェイクスピア劇の女性たちにも、このような社会規範が反映されている。例えば、ヴァージリア（『コリオレイナス』）やヒーロー（『から騒ぎ』）などが理想的な女性として褒めたたえられる理由のなかに、彼女たちの示す従順・貞節に加えて、沈黙があげられる。反対に、カタリーナ（『じゃじゃ馬ならし』）やベアトリス（『から騒ぎ』）が、好ましくない女性とされるのは、彼女たちの口やかましき故である。男性に口応えし、おしゃべりで男性をやりこめる反抗的な態度は、性的にも奔放で貞節ではないとみなさる。そのような女性は、男性にとっては御し難いだけでなく、むしろ男性の権威を脅かす脅威的な存在となる。

女性の「沈黙」が従順の目印であるとすれば、『リア王』の冒頭でみられるコーデリアの沈黙は、注目に値する。父への愛情を言葉巧みに表現する二人の姉ゴネリルとリーガンとは対照的に、コーデリアは、父リアの要求にもかかわらず、父に対する愛の言葉を頑なに拒む。彼女の態度は、明らかにリアにとって反抗的である。この時コーデリアは、姉達とは反対に、沈黙することで父に対する自分の思いを伝えようとしたにすぎず、コーデリア自身に反抗の意思はない。つまり、本来なら言葉を尽くして自分の意思を伝えるところを、コーデリアは沈黙することによって自己主張したといえる。多くの言葉を費やし、饒舌に愛情を語る二人の姉ゴネリルとリーガンに比べれば、コーデリアの沈黙は女性の控え目な態度を示しているともいえるが、リアはそれを理解できず、自己主張という反抗的な態度としてとらえる。言葉巧みにリアを満足させ、後に、老いた父リアをいじめぬき、夫たちを巧みに操るゴネリルやリーガ

ンと対照的に見えるが、父にとって、沈黙を守るコーデリアは男性権威を転覆させる脅威的な存在と映るのだ。

この小論では、女性の沈黙に関して、まず、女性の行儀作法や美德などについて記した当時の文献から、沈黙は、従順と貞節と並ぶ美德としてだけでなく、反抗的な態度を示唆し、男性権威を揺るがす脅威になりうるものとして懸念されていたことを明示したい。そして、当時の沈黙に対する見方をとおして、『リア王』のコーデリアの沈黙について考察する。また、女性の沈黙が必ずしも従順を意味しないという点において、他のシェイクスピア劇に登場する女性たちの沈黙にも着目する。沈黙する姿を性的な魅力として誘惑の手段に利用するクレシダ（『トロイラスとクレシダ』）のように、女性の沈黙は従順の目印であるだけでなく、時には性的な魅力とみなされ、女性はそれを誘惑の手段として利用する。シェイクスピア劇の女性たちの沈黙を通して、当時の女性の沈黙がさまざまな意味合いを持つことを明らかにしたい。

女性の「沈黙」の曖昧性

(1) 「沈黙」という美德

女性の三美德のうち、沈黙は、他の美德である従順・貞節と合わせて、男性が女性に守るように強制し続けてきたものである。それは、沈黙＝閉じた口（closed mouth）は閉じた身体（closed body）であるという観念を基盤にしている。男性に口答えしない控え目な態度は、性的にも慎重深いことを意味し、総体的に従順であるとみなされる³⁾。言葉数少

3) Peter Stallybrass, 'Patriarchal Territories: The Body Enclosed in *Rewriting the Renaissance: The Discourses of Sexual Difference in Early Modern Europe*, ed. Margaret W. Ferguson, Maureen Quilligan and Nancy J. Vickers (Chicago: The University of Chicago Press, 1986), p. 127.

なくおとなしいことは、外から見て視認できる控え目で従順な態度である⁴⁾。そのために、沈黙は従順の目印とされる。また、沈黙すべきという教えを美德として女性に課すことは、父権制社会の要となる男性優位の秩序を維持するためにも不可欠であった。

当時の女性の教育や行儀作法に関するコンダクトブックとして大きな影響力を与えた『キリスト教徒の女性の教育』(*De institutione feminae Christianae*: 1523)の中で、女性の美德について、ヴィヴェスは次のように述べている⁵⁾。

[...] in a woman, chastity is the equivalent of all virtues [...]. If that is safe, everything else will be in safety; if that is lost, all things perish together with it.⁶⁾

[...] 女性においては、貞節こそが他のすべての美德を合わせたものに匹敵するものである。[...] 貞節が守られていれば、その他すべてが安全なものとなろう。だが、もし貞節が失われれば、すべてがそれと共に消滅する⁷⁾。

ヴィヴェスは三美德のうち特に貞節を重視しているが、それは性的な従順を含むからである。つまり、男性に従うべき存在の女性が性的に夫を裏切ることは、美德の一つである従順に反する行為となるのである。ヴィヴェスは「貞節以外に女性から何かを望む者などいない」(‘no one

4) Christina Luckyj, *A moving Rhetoricke : Gender and Silence in Early Modern England* (Manchester: Manchester University Press, 2002), p. 44.

5) ヴィヴェスの『キリスト教徒の女性の教育』の影響力については、*The Education of a Christian Woman*, pp. 30-35; Katherine Usher Henderson and Barbara F. McManus, *Half Humankind: Contexts and Texts of the Controversy about Women in England, 1540-1640* (Chicago: University of Illinois Press, 1985), p. 81 を参照。

6) Vives, p. 85.

7) 本論文で引用に付した当時の文献の日本語訳はすべて拙者によるものである。

asks anything of her but chastity) とし、男性にとって女性の貞節こそが従順の証しであることを強調している⁸⁾。そのうえで、ヴィヴェスは女性に沈黙という美徳を求める：「女性において、舌を制御するのはこの上なくすばらしい美徳である」(‘it is a beautiful and outstanding virtue in a woman to control the tongue’⁹⁾)。舌を制御するとは、口数少なく控え目であることであり、沈黙の美徳にあたる。そして、沈黙＝閉じた口＝閉じた身体という当時の観念を考えれば、沈黙は貞節と同義であり、またそれは従順と同義ともなる。その意味で、ヴィヴェスは、女性におしゃべりを禁じる。

When young women are eloquent, that is, garrulous (for what is eloquence in a woman but garrulity?), it is proof of levity and perverse character, so that the man who intends to marry her will think he is marrying a viper, not a woman.¹⁰⁾

若い女性が流暢に言葉を操る場合、つまり、おしゃべりで口数が多い場合（女性において言葉の流暢さが饒舌以外の何を意味するだろうか？）、それは軽率で頑固な性質の証しであり、そのような女性と結婚する男性は、人間の女性でなく、毒蛇と結婚したと思うだろう。

ここでは、女性の淀みない言葉は饒舌なおしゃべりと同じであり、そのような女性の言葉は毒蛇の毒と同じとみなされている。‘levity’の示す「軽率な」という意味は、言葉が滑るようにその口から出てくるだけでなく、女性のお尻の軽さをも暗示し、口から出る言葉の邪悪さだけで

8) Vives, p. 85.

9) Vives, p. 219.

10) Vives, p. 169.

なく、正道を踏み外した行為を示唆する。また ‘perverse’ の示す「頑固な・ひねくれた」という意味合いから、反抗的な態度として捉えられている。口達者な女性は、言葉だけでなく行動も軽々しく性的にも乱れた女性とみなされる。そして、おしゃべりな女性を「毒蛇」に喩えることは、当時の人々に、イヴをそそのかし禁断の実を食べさせた蛇を連想させるだろう。実際、ジョージ・ウェッブ (George Webb) の『手に負えない舌の処し方』 (*The Araignment of An Unruly Tongue*: 1619) のなかでは、この舌はイヴをそそのかした蛇の舌と結びつけられている (‘By the *tongue* of the *Serpent* was *Eve* seduced.¹¹⁾。それゆえ、ヴィヴェスは、「舌に轡をはめなければならない、心が抑制されればそれは簡単になされるだろう。なぜなら、舌を制御できない多くの女性は、その心が抑制されていないからである」 (‘Now the bridle must be put on the tongue, which is easily done if the mind is bridled. The reason why many women have no control of their tongue is that their mind is uncontrolled.) と述べ、女性に口を慎むことを説いている¹²⁾。女性の饒舌は心が乱れている証であり、それは貞節さを危うくする。逆にいえば、女性の控え目な言葉使いは心が抑制されている証拠であり、その女性の貞節を保証するものとみなされる。

当時の他のコンダクトブックや説教集も、女性に沈黙の美德を説いている。たとえば、トマス・ベーコン (Thomas Becon) は『教理問答集』 (*Catechism*, 1564) で、未婚女性や結婚前の若い女性の務めとして、「貞淑な娘は […] 饒舌に話したり、ペチャクチャおしゃべりしたり、言葉数多くあってはならない、むしろできるだけ言葉数少なくあるべきだ」 (‘honest maids [...] they be not full of tongue, and of much

11) Luckyj, p. 50.

12) Vives, p. 218.

babbling, nor use many words, but as few as they may.) と述べている¹³⁾。ヘンリー・スミス (Henry Smith) は、結婚についての説教集『結婚への準備』(*A preparative to marriage*: 1591) で、「妻は沈黙を守るのがふさわしい」(it becometh her to keep silence) と説いている¹⁴⁾。また、ロバート・ドッド (Robert Dod) とジョン・クリーヴァー (John Cleaver) は、共著『家政の神聖な形』(*A godly form of household government*: 1598) のなかで、「沈黙は好ましくないおしゃべりよりもはるかに良いものである」(‘*silence is far better then such unsavoury talk.*’) と述べ、女性の多弁を諫め沈黙を称賛している¹⁵⁾。

女性は、結婚前も結婚後も、口数少なく沈黙していなければならず、それが父や夫という男性権威への服従の表れとなる。その意味で、女性にとって、沈黙の反対としてみなされる「発言」は、大幅に制限される。なぜなら、女性の過度の発言、つまり口応えや饒舌、罵倒や罵りは、反抗的な態度として許されないだけでなく、開いた口＝奔放な身体を意味し、性的に放縦であり、さらには、男性から支配権を奪い取る脅威とみなされるからである。

(2) 女性の「舌」という武器

女性の饒舌が鋭い武器になることは、先に挙げたウェップの『手に負えない舌の処し方』(*The Araignment of An Unruly Tongue*: 1619) に記されている。ウェップは男女ともに手に負えない口の悪さについて、「妻に対する厳しすぎる夫の舌、夫に対する辛辣すぎる妻の舌」(‘*Husbands tongues which are too bitter against their wives; Wives tongues too sharp against their Husbands.*’) と書いている¹⁶⁾。リン

13) Aughterson, p. 27.

14) Aughterson, p. 83.

15) Aughterson, p. 80.

ダ・ウッドブリッジが指摘したように、夫の言葉には、苦い薬を連想させる 'bitter' が用いられているが、妻の言葉に付された 'sharp' は、触れたら怪我をしそうな武器を思わせる¹⁷⁾。そのイメージ通りに、ウェッブは「口やかましい妻に夫と戦う鋭い武器を与えるのは […] その舌である」('It is the tongue [...], giveth shrewd wives sharpe weapons to fight against their husbands.') と述べ、この舌を「鋭い剣」('this very Tong is a sharp Sword') に喩えている¹⁸⁾。ルネサンス文学にしばしばみられる典型的なイメージとして、剣＝男性器の連想から、妻の鋭い舌が剣に置き換えられることは、妻が夫の権威だけでなく性的能力も奪う脅威を示唆する。

女性の舌と武器のアナロジーは、ベーコンの『教理問答集』にも見つけられる。「妻の夫に対する務め」(*Of the duty of wives towards their husbands*) という見出しが付けられた一節の中で、ベーコンは「ガミガミ言ったり、怒鳴ったり、非難したり、夫に対して全く穏やかでない態度をとること」('to scold, to brawl, to chide, and to be out of quiet with their husbands') は「家庭円満を保つために妻が行うべき慎ましい言葉使いや穏やかな態度」('with their godly conversation and gentle behaviour they go about to maintain amity and concord in their house') とはかけ離れているとして、このような攻撃的な妻の舌を「女の持つ唯一の武器」('a woman hath none other weapon than her tongue') と記している¹⁹⁾。

また、女性の舌「言葉」が男性権威を揺るがすものとして警戒された

16) Luckyj, p. 8.

17) Linda Woodbridge, *Women and the English Renaissance: Literature and the Nature of Womanhood, 1540-1620* (Chicago: University of Illinois Press, 1984), p. 208.

18) Luckyj, p. 50.

19) Aughterson, p. 29.

のには、イヴがアダムをそそのかして禁断の実を食べさせた、という旧約聖書の解釈にも根拠が認められる²⁰⁾。作者不詳の説教集『舌の管理』(*The Government of the Tongue*)では、人間の原罪はイヴの舌〔言葉〕がアダムを誘惑したことに端を発するとしている。このことは、ルネサンスの文人達もかなり頻繁に言及した『旧約聖書』の「創世記」(Genesis)に根拠があるものと考えられる。禁断の実を食べてしまったアダムに向かって、神は「汝の妻の声に耳を傾けたがために、その木から(実を)食べてしまった」('because thou hast hearkened unto the voice of thy wife, and hast eaten the tree)と述べた、と記されている²¹⁾。この記述から、アダムを誘惑し禁断の実を食べさせたのはイヴの言葉だったとみなされていることがわかる。従って、人間の原罪をもたらしたのはイヴの言葉ということになる。

舌=男根という隠喩がしばしば使われていたことから、「舌」は男性の主権や権威と重ねられ、男性を象徴するものとみなされた²²⁾。本来なら男性の武器であり権威を示す舌を使って、女性であるイヴが男性のアダムを誘惑したということは、女性が男性の主権を奪ったということになる。その意味で、自由に言葉を使って話す女性は、男性の主権を篡奪し、男性権威を脅かし、男性中心の社会制度を転覆させかねない恐ろしい存在とみなされたのである。

このように、男性権威を脅かす女性の舌が最も残酷な形で制御された例として、『タイタス・アンドロニカス』に登場するローマの武将タイタスの娘ラヴィニアが挙げられる。ローマ皇帝サターニナスの後妻に

20) Lynda E. Boose, "Scolding Brides and Bridling Scolds: Taming the Woman's Unruly Member," *Shakespeare Quarterly*, 42 (1991), pp. 203-4. 小林かおり、『じゃじゃ馬たちの文化史—シェイクスピア上演と女の表象』(南雲堂、2007年)、pp. 30-31。

21) Genesis, 3:17 in the Bible (1616). 引用は Aughterson, p. 12. を参照。

22) 小林、p.30.

入った后タモーラの息子達ディミートリアスとカイロンに辱められたラヴィニアは、その口から犯人の名が漏れないように、舌を切り取られ、また、文字で告げることもできないように、両方の手首を切り落とされた姿で登場する (24)。抵抗するラヴィニアにカイロンが「お前の口をふさいでやる」(‘I’ll stop your mouth, 2.3.185) と言ったとおり、ラヴィニアの舌を切り取った行為は、彼女の口から犯人の名が告げられるのを怖れての口封じである。さらに、この残忍な犯人たちは、ラヴィニアの手首をも切り落とすことで、言葉の持つもう一つのコミュニケーション手段である文字も書けないようにする。このように、舌も手も切り落とすことで、徹底的に女性の言葉を封じている。それほどまでに非道な行いをするのは、それだけ女性の言葉を怖れている表れといえる。

だが、皮肉なことに、ディミートリアスとカイロンの残忍な犯行は、話す舌も書く手も失ったラヴィニア自身によって明るみにでる。叔父であるマーカス・アンドロニカスに促されて、ラヴィニアは、「口に棒を加えて、手首のない切り株のようになった腕でそれを支えて」、地面に犯人の名を「書く」のである (*She takes the staff in her mouth, and guides it with her stumps, and writes*, 4.1. 76. s. d.)。完全に封じたはずの女性の口から、文字が紡がれ、真実が明らかにされるのだ。

男性権威に対する脅威となる女性の舌は、他のシェイクスピア劇でも、口達者で男性にとって御し難い厄介な存在として登場する。『じゃじゃ馬ならし』のカターリーナは、女性としての美德を失った者とみなされている。そのことは、「ガミガミものを言うさま」(‘her loud alarums.: 1.1.127) を、妻に迎える条件としては父親の財産と比べても願い下げだと言われたり、「腐ったリンゴ」(‘rotten apples.: 135) に喩えられることからわかる²³⁾。口達者で反抗的なカターリーナと対照的に、妹のビ

23) シェイクスピア劇の引用は、特に言及がないかぎり、*The Riverside Shakespeare*, ed. G.

アンカは口数が少なくやさしく控え目な女性（‘[...] in the other s silence do I see/Maids mild behavior and sobriety.: 1.1.70）で、妻として迎えるには理想的な女性とされている。また、武将コリオレーナスの妻ヴァージリア（『コリオレーナス』）も、従順で控え目な女性として登場する。気晴らしに出掛けようという友人の誘いを断り、刺繍を続けるヴァージリアに向かって、友人のヴァレーリアは、「ペネロペ 2 世になろうというのね」（‘You would be another Penelope.: 1.3.82）と揶揄する。ペネロペは、ユリシーズの妻で、女性の三美德である従順・貞節・沈黙を兼ね備えた理想的な女性像として、シェイクスピアの時代では広く知られていた。外出の誘いを断り、家に留まって家事に勤しみ、夫の帰りを待つヴァージリアは、ペネロペのように理想的な女性として描かれている。この時ヴァージリアが従事している家事が縫物であることも、彼女が家庭的で従順な女性であることを示している。なぜなら、針仕事は女性が身につけるべき技術である以上に、出歩かず家に留まっておとなしく静かに家事に勤しむ理想的な女性の象徴とみなされていたからである²⁴⁾。出歩くことなく、妻として家事をきちんとかなすヴァージリアは、実際、コリオレーナスを説得するほどの弁舌をふるう義母ボラムニアとは対照的に、口数も少なく控え目である。また、『から騒ぎ』で、ベネディックに会うと必ず機智の小競り合い（‘a skirmish of wit.: 1.1.63）の舌戦を仕掛けるベアトリスも、口達者で男性に反抗的なじゃじゃ馬である。その対照的な人物として、クローディオが恋するヒーローは、口数少なく控え目で可憐な女性として描かれている。

当時の英国父権制社会では、女性の沈黙は、従順・貞節と並んで美德

Blakemore Evans (Boston: Houghton Mifflin Company, 1974) を原典とする。日本語訳はすべて拙者によるものである。

24) Ayano Hamada, *Women in the Days of Shakespeare and His Plays: Education, Eloquence and Marriage* (神奈川大学大学院『言語と文化論集』特別号, 2006), pp. 9-18.

として奨励され、外から見て最もわかり易い従順の目印の役割を果たしていたといえる。同様に、おしゃべりや口応え、罵倒などは、性的にも奔放で夫を裏切る不貞を犯す女性とみなされ、反抗的な態度の目印となり、さらには、男性権威を揺るがす脅威の印にもなった。

(3) 頑固・反抗的とみなされる「沈黙」

しかし、少し時代は下るが、ウィリアム・グージ (William Gouge) は、従順の印である女性の沈黙に対して、「強情な性格、心の頑なさ」(‘stoutness of stomach, and stubbornness of heart’) を示唆するとして懸念している。家庭内で夫や妻が果たすべき義務や責任について記した『家庭内の務め』(*Of Domestic Duties*, 1622) のなかで、グージは、妻は夫に対して沈黙を保つべきであるとした後に、「夫の前で常に黙っていなければならないのか」(‘*Object*. Then belike a wife must always mute before her husband’) という意見に対して、次のように回答している。

Ans. No such matter: for silence in that place is not opposed to speech, as if she should not speak at all, but no loquacity, to talkativeness, to over-much tattling; her husband's presence must somewhat restrain her tongue, and so will her very silence testify a reverend respect. Otherwise silence, as it is opposed to speech, would imply stoutness of stomach, and stubbornness of heart.²⁵⁾

回答。そのようなことはない：この場合の沈黙とは、まるで妻がまったく言葉を発するべきでないかのような、発言することに相反す

25) William Gouge, *Of Domestic Duties*, ed. and rev. Greg Fox (Edinburgh: Puritan Reprints, 2006), p.199.

るものではなく、むしろ多弁、おしゃべり、無駄口の対照をなすものである。夫の前では多少なりとも妻の舌は抑制されなければならず、そうであればこそ妻のその沈黙が敬愛なる尊敬の証しともなろう。さもなければ、沈黙は、発言と対照的なものとなり、強情な性格、心の頑なさを示すものとなるだろう。

グージは、妻の沈黙が絶対的なものではなく、相対的なものとしている²⁶⁾。妻は、夫の前で「全く言葉を発するべきでない」という意味での沈黙ではなく、「多弁・おしゃべり・無駄口」にならないように、言葉数少なくすべきであるというのだ。その意味で、口数が少ない控えめな態度としての沈黙以外は、強情や頑固さの表れだとしている。

さらにグージは、口数が多い妻の脅威について、次のように続けている。

[...] If their husbands have begun to speak, their slippery tongues cannot expect and tarry till they have done: [...] they will surely take that tale out of his mouth before he have done: Thus they disgrace themselves, and dishonour their husbands.²⁷⁾

夫が話し始めると、妻の滑りやすい舌は夫の話が終わるまで待つことができない [...] そのような妻はきっと夫が話し終える前に夫の口からその話を奪ってしまうだろう。こうして、妻は自分自身をはずかしめ、夫の名誉を汚すのである。

グージの記述のなかで、おしゃべりな妻が夫の話を奪い取るという表現

26) Luckyj, pp. 58-59.

27) Gouge, Ibid.

は、‘tale’が‘tail’の発音と同じであり、男性器の意味をもつことから、妻が夫の生殖力を無能にする脅威を暗示している²⁸⁾。口達者な妻は、夫の言葉だけでなく性的能力も奪うことになり、子孫の繁栄も男性優位の秩序も転覆させる脅威的な存在とみなされている。

しかし、グージは、口達者な妻だけを脅威とみなしているのではなく、沈黙する妻も同様にやっかいだとしている。言葉を発しないことが「強情な性格、心の頑なさを示す」のであれば、言葉数少なく夫に口答えしない従順さとは異なるものであり、おしゃべりよりも御し難いかもしれないと考えている。女性の沈黙に関して、ウィリアム・ウェイトリー (William Whately) は、『ブライド・ブッシュ』 (*A Bride-bush*:1617) のなかで、一言も話さない態度を夫に対して無礼な態度として非難している (‘contempt, though her tongue bee altogether silent.’²⁹⁾)。言葉を発しない妻の態度は、夫に不快感を与え、反抗的な態度としてみなされる。『オセロ』で、イアゴーが嫌味をいう妻の沈黙はこのような反抗的な意味合いを帯びている。オセロより先にキプロス島に到着したデズデモーナを出迎えたイアゴーは、彼女と共にやってきた妻エミリアの手にキスをして挨拶するキャシオに対して、エミリアの口数の多さに用心するように軽口をたたく (2.1.100-2)。それを受けて、デズデモーナが「あら！彼女はおしゃべりじゃないわよ」 (‘Alas! she has no speech.: 2.1.102) と弁護すると、イアゴーは「それじゃあ、奥さまの前では、きっと、あいつは舌を胸の中に引っ込めて、心の中でブツブツ文句を言っているんでしょう」 (‘She puts her tongue a little in her heart, / And chides with thinking.: 2.1.106-7) と切り返す。「デズデモーナの前では」と言っているが、イアゴーが、夫の前で黙る妻を、表向きは控えめ

28) Luckyj, p. 59.

29) Luckyj, p. 60.

に沈黙しているが内心は不満を隠している反抗的な態度だと考えているのは想像に難くない。また、後に考察するが、リアに愛情の言葉を要求されても頑なに拒むコーデリアの沈黙も、反抗的な態度とみなされたといえることができる。

(4) 「沈黙」という女性の魅力

従順の証とされている女性の沈黙は、時に、抵抗や反抗を示すこともあるが、また、性的な魅力として捉えられることもある³⁰⁾。例えば、『尺には尺を』で、結婚前に女性と関係を持ち妊娠させたことが法に触れ、死刑になりそうなクロードイオが、妹イザベラに助けを求める際に、次のように述べている。

Claud. [...] for in her youth
 There is a prone and speechless dialect,
 Such as move men; beside, she hath prosperous art
 When she will play with reason and discourse,
 And well she can persuade. (1.2.182-86)

クローディオ。 […] 彼女の若さには
黙っていても熱心に語りかけるとある魅力がある、
男を動かすような。それに、彼女には事を上手く運ぶ術がある、
理性と言葉を使うことにかけては、
だから、彼女なら首尾よく説得できるだろう。

イザベラは、裁判で公爵の代理アンジェローを説得できるほどの雄弁術（prosperous art/with reason and discourse）を心得ているが、クロ

30) Luckyj, p. 63.

ーディオは、むしろ彼女の沈黙（‘speechless’）する姿に、アンジェローは魅了されるだろうと予想し、それに助命の望みをかけている。女性の沈黙は性的な魅力として、男性の心を動かすのに言葉以上に効果があると考えているのだ。

『ルークリース凌辱』では、ルークリースの美貌は「百合の花のように白い肌と薔薇のように赤い唇が黙って競い合っている」(‘This silent war of lilies and roses/Which Tarquin view d in her fair s field, 71-71)と描かれている。‘silent’ という表現から、ルークリースの見た目の美しさだけでなく、控えめで静かな女性らしい物腰が窺え、彼女の夫コラティンによる妻の貞節を語った自慢話に刺激されたタークインが、彼女の美貌とその控えめな物腰に魅了されていることがわかる。イザベラやルークリースに見られるように、女性の沈黙は、男性にとって性的魅力を感じさせるものとして捉えられている。

また、クレシダのように、沈黙を誘惑の手段として利用する女性もいる。トロイラスに対して自分の想いを告げる時、クレシダはそれまで口をきかずに気のないそぶりをしていたことは嘘だと告白する。

Cres. [...] In faith I lie,
My thoughts were like unbridled children grown
Too headstrong for their mother. See, we fools!
Why have I blabb'd? [...]
But though I lov'd you well, I woo'd you not,
And yet, good faith, I wish'd myself a man,
Or that we women had men's privilege
Of speaking first. (3.2.121-29)

クレシダ、[…] ええ、それは嘘です、

私の想いはまるで母親の手に負えない子供のように
 我がままに大きくなってしまいました。ああ、なんて愚かな！
 こんなにペラペラとしゃべってしまっ。[…]
 あなたを愛していましたが、私からは口に出せませんでした、
 でも、自分が男であれば、とか、
 女も殿方がもつ権利を持っていればいいのにと願いました、
 先に言葉をかけることができる権利を。

クレシダは、女性から男性に想いを告げるのは不徳とされていたことを前提に、不埒な女とみなされないように、先に声をかけること（‘speaking first’）はせずに黙っていたと説明する。しかし劇の冒頭から、口をきかずに黙って気のないふりをするのが、クレシダの誘惑の手段であるのは明らかである（1.2.282-95）。クレシダは、抑えきれない（‘unbridle’）想いが、つい口から溢れ出てしまった（‘blabb d’）かのよう装うことで、逆説的に、普段は言葉数少なで控え目であり、自分から男性に声をかけたりしない貞淑な女性であるという印象を与えようとしている。そして、そんな控え目な自分が、トロイラスへの募る想いのせいで思わず言葉を発してしまったと振舞うことで、トロイラスをさらに惹きつけようとしているように見える。実際、クレシダは、誘惑の仕上げに、「私の口をふさいで」（‘bid me hold my tongue, / ‘Stop my mouth. : 3.2.129, 133）と二度繰り返す。表向きは、これ以上おしゃべりしないようにという意味だが、トロイラスはキスの誘いとして解釈する³¹⁾。クレシダは、女性が言葉を発せずに黙っている姿には性的な魅

31) クレシダの2度目の台詞の後、舞台上で実際にトロイラスがクレシダにキスをするようト書きがある（[‘Kisses her.】）。女性のおしゃべりをキスで封じるのは、『から騒ぎ』の終幕でベネディックとベアトリスにも見られる（*Benedick*. ‘Peace, I will stop your mouth. [‘Kissing her.]: 5.4.98）。

力があることを十分に理解した上で、わざと口をきかずにトロイラスの気を引いた。ここでは、女性の沈黙が誘惑の手段として最大限に利用されている。

女性の沈黙は、饒舌やおしゃべりと相反するものとして、従順・貞節の証しになり美德とみなされる。しかし、それだけでなく、沈黙は、強情や頑なさを暗示し、反抗的な態度にもなりうる。また、性的な魅力としてみなされることもある。このように、女性の沈黙は、実にさまざま意味合いをもっている。リチャード・ブラスウェイト (Richard Brathwait) は、その著書『イギリスの貴婦人』(*The English gentlewoman*: 1614) のなかで、「女性の沈黙は人を動かす巧みな雄弁と同じである」(‘Silence in woman is a moving rhetoric.’) と述べている³²⁾。当時の英国父権制社会において、沈黙を美德として女性に課すことは、男性にとって女性を支配し閉じ込める役割を果たしたが、女性にとっての沈黙は、何かを伝えたり行ったりするための手段として、実際に言葉を話す以上に効果的なものだったといえるだろう。

コーデリアの沈黙：従順と反抗と自己主張

リアは、自分の王国を娘三人に分割・譲渡するために、それぞれの娘に、父に対する愛情を言葉で競わせる。姉二人は言葉巧みにリアを喜ばせるが、コーデリアは当惑し「沈黙する」(‘[*Aside*.] What shall Cordelia speak? Love, and be silent.: 1.1.61)³³⁾。ここで、コーデリアは

32) Aughterson, p. 84. Luckyj はこの語句をタイトルに付したその著書の中で、ジェンダーと沈黙の関連について考察している。

33) 『リア王』の引用は、*The Arden Shakespeare King Lear*, ed. Kenneth Muir (London: Methuen, 1972; rept., Routledge, 1992) を原典する。‘speak’ としているのは二折本で、四折本では ‘do’ となっている。リアが言葉で愛情を表現するのを要求していることから、また、リアがコーデリアの言葉少なさに激昂することからも、二折本の読みがより適切と考える。

父リアへの愛情を「言葉で表現する」(‘speak’)のに窮しているだけでなく、長女ゴネリルが「言葉にできる以上」(‘more than word can wield the matter, 1.1.54)の愛を抱いていると述べたことへの戸惑いも示している。この戸惑いは、ゴネリル同様に、次女リーガンもリアへの愛情を饒舌に述べた後のコーデリアの傍白によって明かである。「私の愛情は私の舌よりもずっしりと重いのである」(‘since I am sure my love s / More ponderous than my tongue.: 1.1.76-77)というコーデリアは、愛情をすらすらと言葉にのせる姉二人と違って、父リアへの自分の愛情は舌にのらないほど重い、つまり、愛情が言葉にできないのを知っている。それゆえに、コーデリアは「沈黙」する。

真実や深い心情など、容易に言葉にできないものは、あえて必要以上に言葉を尽くして表現したりせず、逆に、言葉少なめに、または言葉にすることを控えたりするのがよいという考えは、シェイクスピアの『ソネット集』にもみられる³⁴⁾。

I never saw that you did painting need,
 And therefore to your fair no painting set;
 I found (or thought I found) you did exceed
 The barren tender of a poets debt;
 And therefore have I slept in your report,
 That you yourself, being extant, well might show
 How far a modern quill doth come too short,
 Speaking of worth, what worth in doth grow.
 This silence for my sin you did impure,
 Which shall be most my glory being dumb,

34) 他にもソネット 84・85・101 番など、同様のテーマを扱っているものがある。

For I impair not beauty being mute,
 When others would give life and bring a tomb. (*Sonnet 83*)

君に化粧が必要だと一度も思ったことはない、
 だから君の美しさに化粧をほどこしたこともない。
 詩人が恩義のお返しとして無駄な称賛を贈っても
 君はそれを超えていた（私はそう思った）。
 私が君を称賛することを怠けていたのは
 君自身がそこにいれば、それを示すことになるからだ、
 ありていの筆が、美質を語ったとしても
 君の中で輝く美質には遙かに及ばないということ。
 この沈黙を君は私の罪としたけれど、
 語らぬことこそ私の最大の誇り。
 なぜなら、私は沈黙することで美を汚すことはないが、
 他の人たちは命を与えようとして墓をたてるのだから。

詩人は、称賛のために重ねられる言葉を「化粧」(‘painting’)に喩え、本来の美そのものが、塗り重ねられた言葉の化粧を遙かにしのぐものであるがゆえに、言葉で飾ることはできないし、あえて言葉を尽くすこともしない(silent/dumb/mute)と述べている。余計な言葉で飾ることで、逆に「美を汚す」のを怖れてもいる。つまり、簡単に言葉で表せないものに対しては、余分な言葉を重ねず沈黙しているほうがよいというのだ。

この詩人の沈黙には、父への愛情を言葉にできないコーデリアの沈黙とつながるものがある。コーデリアは、いくら言葉を紡いでも自分の中にあるリアへの深く強い愛情を表現できないのをわかっているが故に沈黙した。反対に、ゴネリルやリーガンが饒舌に繰り出した言葉は、この

詩人のいう「化粧」にあたり、美を汚すものである。そのとおり、この二人の口で表現された愛情は、後に、領地を自ら統治して主権を握りたいという野心に汚された偽りだったことがわかるのである。

姉二人の愛情の熱弁が終わり、コーデリアの番となる。リアに「話せ」(Speak.: 1.1.85)と促されて、コーデリアは「何もございません」(Nothing.: 1.1.86)と答える。その答えに驚いて鸚鵡返しに「何も？」(Nothing?: 1.1.87)と聞き返すリアに対して、「何もございません」と同じ返答をする(Nothing.: 1.1.88)。さらにもう一度、姉二人のように愛情を言葉にするよう要求するリアに('speak again.: 1.1.89)、コーデリアは次のように答える。

Cor. Unhappy that I am, I cannot heave

My heart into my mouth: I love your Majesty

According to my bond; no more nor less. (1.1.90-92)

コーデリア. 不幸なことですが、私は自分の思いを

自分の口まで持ち上げることができません。お父様を愛しています

親子の絆に従って。それ以上でもそれ以下でもありません。

コーデリアは、ゴネリルやリーガンが言葉にならないほどの愛情を言葉で表現したことの矛盾に反論しているようにみえる。コーデリアは、「自分の思い」をまったく口にできないのではなく、姉二人のように自分の思いを過剰な言葉で飾れないのである。そのことは、「それ以上でもそれ以下でもない」簡潔な言葉、「お父様を愛しています」によって示されている。

さらにコーデリアは、「親子の絆に従った」愛情という表現で、夫の

いる姉二人の父に対する愛情の言葉について疑問を投げかける。

Cor.

Good my Lord,

You have begot me, bred me, lov d me: I
 Return those duties back as are right fit,
 Obey you, love you, and most honour you.
 Why have my sisters husbands, if they say
 They love you all? Happily, when I shall wed,
 That lord whose hand must take my plight shall carry
 Half my love with him, half my care and duty:
 Sure I shall never marry like my sisters,
 To love my father all. (1.1.94-103)

コーデリア、

お父様、

お父様は私をこの世に誕生させ、育て、愛してくださいました。

私は

そのことに見合ったご恩返しを当然の義務としてするつもりです。

お父様に従い、お父様を愛し、お父様を最も敬い申し上げます。

なぜお姉さま方は夫をお持ちなのでしょう、もし

すべての愛をお父様へ捧げるとおっしゃれるなら。もし私が結婚したら、

誓いを交わした私の夫はその手に

私の愛情の半分を、私の気遣いとお努めの半分を持っていくことになるでしょう。

私は決してお姉さま方のような結婚はしません、

お父様だけを愛するというような。

期待はずれのコーデリアの返答にリアは激昂し、忠臣ケント伯爵が制するもの聞かず、コーデリアを勧告しようとする。その仕打ちを、コーデリアに求婚していたフランス王はにわかに信じられず、理由をコーデリアに問うと、彼女はリアの不興を買った理由を「ペラペラしゃべり心にもないお世辞を上手にいう術」(for I want that glib and oily art/ To speak and purpose not)を持たないからだとして述べる。

Cor. I yet beseech your Majesty,
(If for I want that glib and oily art
To speak and purpose not, since what I well intend,
I'll do't before I speak) , that you make known
It is no vicious blot, murther or foulness,
No unchaste action, or dishonour'd step,
That hath depriv'd me of your grace and favour,
But even for want of that for which I am richer,
A still-soliciting eye, and such a tongue

That I am glad I have not, though not to have it
Hath lost me in your liking. (1.1.222-32)

コーデリア。 お願いです、お父様、
(私がペラペラしゃべり心にもないお世辞を上手に言う術を
持ち合わせていないが故に、というのは、心に思うことは
言葉にするより先に行おうと思っているからですが)、おっし
ゃってください
殺人や不正といったような、忌まわしい汚点ではなく、
淫らな行いや、不名誉な行為などでもなく、
お父様のご寵愛を失ったのは、
むしろ持ち合わせていないことでもっと豊かになるものに欠け
ていたからだと、
ねだるような眼差しや、持っていないくてよかったと
思えるような舌、もっともそれを持っていないがために
お父様に嫌われてしまいました。

コーデリアは、リアの不興を買った原因を自分の口べたのせいだと述べることで、法を犯すような殺人や不正といった恐ろしい汚点や、特に、女性にとって致命傷となる不貞という汚点がつくことを避けている。「ねだるような眼差し」(A still-soliciting eye)は、「ペラペラしゃべり心にもないお世辞を上手に言う術」(‘hat glib and oily art/To speak and purpose not)と重なり、言葉巧みに男に言い寄り「みだらな行為」(‘unchaste action)にふける女性を連想させる。そのような眼差しも舌も持たないが故に、コーデリアは「より豊かに」なるはずだったが、かえてリアの不興を買い、相続するはずの領地も持参金も失ってしまう。だが、コーデリア自身は、そのような眼差しも舌も持ち合わせてい

ないゆえに、彼女の貞節には一点の曇りもないことを示している。

コーデリアに欠けていた舌は、この直後のフランス王によって「生来の無口な性格」(‘a tardiness in nature.’: 1.1.234) と呼ばれている³⁵⁾。リアによってはじまった愛情表現コンテストの冒頭で、コーデリアが決意した「沈黙」(‘silence’) は、一言も言葉を発しないものではなく、グーじが述べたような、「多弁・おしゃべり・無駄口」と対極とされるものである。コーデリアは、ペラペラと過剰に言葉を繰り出してしゃべらずに、言葉数少なに控え目である沈黙を守ったといえる。コーデリアの沈黙は、口数が多いのは女性の不徳とみなされる当時の社会規範を反映しているだけではない。リアにもっと言葉を尽くすように要求されてもコーデリアが頑なに拒んだのは、饒舌な姉二人の偽りの愛情と違って、自分の愛情は言葉にならない分だけ本物であることを、「沈黙」という姿勢で主張したのである。この点において、コーデリアの沈黙は、饒舌とは相反する控え目な態度として女性の美德に通じるが、同時に、この場合、リアにとっては反抗的な自己主張の形といえる。この自己主張は、父リアには娘の反抗的な態度としか映らない。なぜなら、もっと言葉を尽くすようにという要求を拒むからである。リサ・ジャーディンは、コーデリアの沈黙を、美德ではなく、リアにとって子としての愛情の拒否ともなると指摘している³⁶⁾。たしかに、本来なら従うべき父に娘が逆らっているので、リアは従順を拒否されたことになる。しかし、ここで重要なのは、コーデリアの沈黙は、言葉少なに控え目である女性の美德と矛盾しない。その意味で、コーデリアの沈黙は、女性の美德としての多くを語らない姿勢を示しながら、逆説的に、コーデリア自身にとっては自己主張の手段となり、リアにとっては父に逆らう娘の反抗という意

35) *The Arden Shakespeare King Lear*, note on ‘tardiness in nature’] natural reticence.

36) Lisa Jardine, *Still Harping on Daughters: Women and Drama in the Age of Shakespeare* (Sussex: The Harvester Press, 1983), p. 108.

味を示し、男性の権威を揺るがす危険なものとなる。実際、このコーディリアの沈黙から、リアの悲劇が始まったともいえる³⁷⁾。

逆に、饒舌に愛情を語るゴネリルやリーガンは、リアにとって従順な娘となる。それゆえに、フランス王とともに立ち去る際に、コーディリアはゴネリルに「お前には従順さが足りない」(‘You have obedience scanted.: 1.1.277)と言われる。この従順さとは、当時の英国父権制社会が女性に課した、男性に従うという美德である。だが後に、この従順さに欠けているのは、ゴネリル自身であることが明らかになる。

コーディリアを勘当し、王国を姉娘二人に分割したリアは、最初にゴネリルの館に逗留する。百人の従者を連れ、その従者の乱暴な振舞いや、リア自身の横柄な態度に、ゴネリルはリアに対して、甘やかされ悪さをする子供を叱るように (1.3.20-21)、厳しく接する。その様子を見て、リアの道化は「荷馬車が馬を引いている」(‘a cart draws the horse.: 1.4.221) と述べ、ケネス・ミュアーがアーデン版の註でコメントしているように、娘が父親を指導しているという、父権制社会の秩序が逆転していることを指摘している³⁸⁾。

このように、子が親を御しているという権力構造の逆転は、リーガン自身も認めている。ゴネリルのところを飛び出してきたリアに対して、リーガンは「お父様のことをお父様ご自身以上に、わかっていらっしゃる方の思慮分別に任せて従うべきです」(‘you should be rul d and led/ By some discretion that discerns your state/Better than you yourself: 2.4.145-47) と諭す。この場合、「お父様のことをお父様ご自身以上にわかっていらっしゃる方」とはゴネリルであり、それゆえに、ゴネリルのところにおとなしく帰るべきだと、リーガンはリアを説得しようとする

37) Luckyj, pp. 96-97.

38) *The Arden Shakespeare King Lear*, note on 1.4.221.

(2.4.147-48)。リアは二人の娘に「支配され」(‘ruled’)しており、リアの父としての権威は娘二人に奪い取られている。

父を支配しようとする娘ゴネリルは、夫であるオールバニー公爵と立場をも従えようとする。不義の相手であるエドモンドと、夫亡き後、共に領地を支配しようという野望を抱くゴネリルは、オールバニーを「おとなしい夫」(‘mild husband’: 4.2.1)と呼んでいる。これは、ゴネリルの父リアに対するむごい仕打ちを咎めるオールバニーを、「臆病者!」(‘Milk-liver d man!’: 4.2.50)と非難する言葉と呼応する。ゴネリルは、エドモンドに対して、気弱で小心者の夫に代わって、自分が夫の役割を務めると言う。

Gon. It is the cowish terror of his spittit

That dares not undertake; he ll not feel wrongs

Which tie him to an answer. [...]

[.....]

I must change arms at home, and give the distaff

Into my husband s hands. (4.2.12-18)

ゴネリル、あの人の牡牛のような臆病のせいです

思い切って事を起こせないのは。仕返しして当然の侮辱にも

気付かない振りをする。[...]

[.....]

私はここで夫と武器の交換をしなくては、そして糸巻き棒を

あの人の手に渡しましょう。

兄エドガーによる暗殺計画をでっち上げ、父グロスターを騙し、兄をも追放の身とし、自分がのし上がるためなら手段を選ばず悪行に手を染め

るエドマンドとは対照的に、オールバニーは受けた侮辱の報復すらできない「臆病」者とみなされている。そのゆえ、ゴネリルは、本来ならば妻の持つべき「糸巻き棒」を夫に、そして夫が持つべき武器、すなわちここでは剣を自分が持ち、男のように振舞う。糸巻きは、針仕事と同様に、女性の重要な家事労働であり、それに用いられる道具の糸巻き棒は、家庭的で理想的な妻のシンボルであった。先に述べたヴァージリアが表現しているように、針仕事や糸巻きに従事する女性は、家の中で家事に勤しむ従順な妻を意味する。その糸巻き棒を手放すことは、女性の美德を備えた理想的な妻の役割を捨てることであり、そのかわりに剣を持つことは、男性権威を手にするものである。ゴネリルは、従順な妻ではなく、支配権をもつ夫の立場に立とうとしている。その意味で、ゴネリルは、父権制社会の基盤である男性優位の権力構造を危うくする脅威的な存在といえる³⁹⁾。

夫の上に立ち権威を振るおうとするゴネリルの手にしている武器は、夫と交換した剣だけではない。リアは、リーガンに、ゴネリルの酷さについて「鋭い歯をもった不人情」(‘Sharp-tooth d unkindness.: 2.4.132)と訴え、また、「蝮のような舌で私のこの心臓を刺し貫いた」(‘struck me with her tongue,/Most serpent-like, upon the very heart.: 2.4.157-58)と嘆く。どちらも、‘sharp-tooth d /her tongue という語句が示すように、特にゴネリルの言葉に関連している。愛情を巧みな言葉で語り、リアを満足させた饒舌な口は、いまや、「鋭い」痛みを伴い、「蝮のように」毒をもってリアを苦しめている。ゴネリルの口、すなわち言葉は、ウェップが指摘したように、鋭い武器そのもののなのである。従順な妻の立場を捨て、夫を制する立場に立とうとするゴネリルは、実物の剣だけ

39) 夫を言葉で操り主導権を握ろうとする女性としてマクベス夫人やデズデモナもあげられる。Hamada, pp. 141-49.

でなく、達者で鋭い舌という武器も手にしているのである。実際にゴネリルは、その非情な振る舞いと鋭い舌ゆえに、同様に夫の権力を奪おうとするリーガンと比べても、武人によりふさわしいと表現されている（‘better soldier, 4.5.3）。

父権制の男性優位の秩序を逆転させ、自ら主導権を握り思い通りに事を運ぼうとして、男性のもつ武器を手にするのは、ゴネリルだけではない。リーガンが、夫コーンウォール公爵と共に、エドマンズの計略と知らず裏切りの咎でグロスター公爵を拷問にかけるとき、彼女の舌は「すぐに縛り首に」（‘Hang him instantly.: 3.7.4）や「恩知らずの狐！こいつだ」（‘Ingrateful fox! tis he.: 3.7.28）、「きつく、固く。ああ、汚らわしい裏切り者！」（‘Hard, hard. O filthy traitor! : 3.7.32）といった辛辣で厳しい言葉を放つ。これらの台詞はどれも非常に短いため、舞台上ではリーガンを演じる役者に動きが加えられ、それに伴うように鋭くピシャリと言い放たれるように演出されるだろう。リーガンの言葉は、「鋭い」武器として男性権威に向けられる。さらに、リーガンも、グロスターを庇おうとした召使いと対峙して、実際に剣を手にする（‘Give me thy sword.: 3.7.78）。甘い言葉でリアを喜ばせた姉娘二人は、同じその舌を鋭い武器に変え、手には剣を持ち、男性の上に立ち主導権を振るう「残忍な鬼婆」（‘you unnatural hags.: 2.4.276）となり、男性が女性を支配するという自然の秩序を揺るがす。二人は、不自然で恐ろしい怪物として父権制社会に脅威を与える存在となる。

娘二人に思いもよらず酷い仕打ちをされたリアは、茫然自失で荒野をさまよい、やがてコーデリアが率いるフランス軍に保護される。軍を率いるコーデリアは、剣を手にするゴネリルやリーガンと重なるが、残酷な鬼婆や怪物のような姉二人とは異なる。意識を失っている父リアをみて、コーデリアは自分を癒しの薬に喩えて次のように述べる。

Cor. O my dear father! Restoration hang
 Thy medicine on my lips, and let this kiss
 Repair those violent harms that my two sisters
 Have in thy reverence made! (4.7.26-29)

コーデリア．ああ、お父様！回復を促す薬が
 私の唇に宿り、このキスが
 お姉さま方二人がお父様に与えたひどい傷を
 癒すことができますように！

コーデリアの唇に宿る薬とは、後にリアが彼女の臨終で述べる、彼女の「穏やかで、優しく、柔らかい声」(‘Her voice was ever soft,/Gentle and low, 5.3.271-72) であり、その声で紡がれる優しい言葉である。ここで使われている ‘soft/gentle/low という形容詞は、当時の人々が理想とした女性にふさわしい言葉や話し方を示している。ウェイトリーは『プライド・ブッシュ』のなかで、妻は夫に対して「優しく穏やかな話し方」(‘utter that in still and mild manner) をするように説いている⁴⁰⁾。穏やかで優しく柔らかい話し方は、おとなしく控え目な態度に通じる。low は「身分の低い・低姿勢の」を意味し、男性の下に置かれた女性としての社会的立場に呼応する。また、‘soft/gentle は、ウェットが批判した女性の鋭い舌という ‘sharp と相対するものである。話し方は、同時に、話される言葉にも通じる。おとなしく控え目な話し方は、穏やかで優しい言葉を発する。このようなコーデリアの話し方や言葉は、「女性のこの上ない美点」(‘an excellent thing in woman.: 5.3.272) であり、ゴネリルやリーガンの「鋭い歯」や「蝮のような舌」

40) Aughterson, p. 33.

とは対極をなす。

目を覚ましにかけているリアを前に、コーデリアは医師と次のようなやりとりをする。

Cor. Tis wonder that thy life and wits at once

Had not concluded all. He wakes; speak to him.

Doct. Madam, do you; tis fittest. (4.7.41-43)

コーデリア． お命と正気を一度になくしてしまわれなかったのが不思議です。お目覚めです。声をかけてさしあげて。

医師． どうぞ、お妃さまから。それが最もふさわしいでしょう。

コーデリアは、リアを激怒させ勘当された身なので、弱っているリアにこれ以上心痛を与えないように気遣って、医師から声をかけるように言ったのかもしれない（‘speak to him’）。だが、娘二人に手ひどく扱われたリアにとって、コーデリアの穏やかで優しい言葉は何よりの薬となるだろう。その意味で、医師は、目を覚ましにかけているリアに対して、コーデリアが声をかけるのが「最もふさわしい」（‘tis fittest.: 4.7.43）として、リアに話しかけるように彼女を促すのである。

勘当した末娘との再会を喜んだのも束の間、オールバニー公が率いるブリテン軍に、リアとコーデリアは捕えられる。エドマンズの計略で、早まって絞殺されたコーデリアの遺体を抱きかかえてリアが登場する。リアは、彼女の息がまだあるのを鏡で確かめようとする。

Lear. Howl, howl, howl! O! you are men of stones:

Had I your tongues and eyes, I d use them so

That heaven s vault should crack. She s gone for ever.

I know when one is dead, and when one lives;
 She's dead as earth. Lend me a looking-glass;
 If that her breath will mist or stain the stone,
 Why, then she lives. (5.3.256-62)

リア． ほえろ！ ほえろ！ ほえろ！ ああ！ お前たちは岩か。
 もし俺にお前たちの舌と目があったら、それを使って
 蒼天がひび割れるほど泣き叫んでやる。こやつは逝ってしまった。
 死んでいるのか、生きているのか、俺にもわかる。
 こやつはすでに死んでいる、まるで土のように。鏡を持ってこい。
 もしこやつの息で鏡が曇ったり霞んだりすれば、
 ああ、そうしたらこやつはまだ生きている。

リアは、死んだコーデリアを目の前にして動けずにいる周囲の人間を物言わぬ「岩」に喩え、微動だにできない彼らの代わりに「舌」を使って大声を出して、コーデリアを失った悲しみを天に訴えようと言う。ここで岩に喩えられている人びとは、「土のように」動かず物言わずに横たわっているコーデリアに重なる。また、このリアの台詞に続くケントやオールバニーの台詞が10音節に満たない短い台詞であることも、リアを取り囲む人物たちの寡黙を示している。リア以外の人物が言葉を失っていることによって、コーデリアの無言の死とその悲しみの大きさが強く印象づけられる。

息があれば鏡が曇るはずだが、近づけた鏡は曇ることなく、そこからは何も読み取れない。しかしリアは、羽が揺れたのを息のある証として（‘This feather stirs; she lives!': 5.3.264）、コーデリアの唇に近づき、そこ

から洩れる息を聴きとろうとする。

Lear. Cordelia, Cordelia! stay a little. Ha!

What ist thou say st? Her voice was ever soft,

Gentle and low, an excellent thing in woman. (5.3.270-72)

リア、コーデリア、コーデリア！ もう少し待ってくれ。はっ！

なんとやったのだ？ こやつの声は穏やかで

優しく柔らかかった、女の持つこの上ない美点だった。

コーデリアの唇が動いたと思い、その言葉を聴き取ろうと (What ist thou say st?), 必死に耳を傾けるリア。だが、横たわるコーデリアの口からは何も聞こえない。リアは、皮肉にも、その言葉数の少なさで反抗的だとして自ら退けたコーデリアの控えめな声「言葉」を彼女の優れた美点だったと思い出している。

コーデリアの死という沈黙によって、劇は冒頭の彼女の沈黙に再び戻る。リアは、最初に拒んだコーデリアの「沈黙」を、今度は皮肉にも、必死に聴き取ろうとする。鏡の曇りがあるか見て取ろうとし、かすかな声がしないか聴き取ろうとするが、何も見て取れないし何も聞こえない。コーデリアはもう言葉を発しない。言葉を介して意思疎通をはかるのを第一義的な手段にしている人間にとって、相手から何も聞こえてこないのは致命的である。土のように動かない無言のコーデリアから、今、リアが聴き取れるのは、彼女の死という完全な沈黙のみである。コーデリアから発しているものがあるとすれば、リアに自分の死を伝える彼女の沈黙のみであるといえるだろう。リアは、劇の冒頭で自ら拒んだコーデリアの沈黙だけを彼女の死として聴き取るのである。

終わりに

シェイクスピア時代の英国で、父権制社会の規範として女性に課された「沈黙」の美德は、従順の目印というだけに収まらず、さまざまな意味合いを帯びている。沈黙が強情や頑なさを示す一方、性的な魅力と置き換えられることもある。クレシダのように、男性を誘惑する手段として沈黙を利用する女性もいれば、また、コーデリアのように、沈黙が自己主張の形になる場合もある。

愛情を言葉で表現できないがゆえに、コーデリアは言葉少なに「沈黙」した。言い換えれば、沈黙することで自分の思いを伝えようとしたのである。しかしこの沈黙は、リアにとっては、父の要求に従わない娘の反抗的な態度と映る。グージが指摘したように、女性の美德の一つである沈黙が強情や頑なさとしてみなされている。反対に、言葉巧みに愛情を表現したゴネリルやリーガンが父に従順な娘とみなされる。しかし、女性が多弁であることを良しとしない社会規範を前提にしてみると、コーデリアの沈黙はゴネリルやリーガンの言葉巧みな愛情表現と対照的である。その意味で、コーデリアの沈黙は、女性の美德とされた控え目な態度と相いれないものではないが、父リアにとっては、従順でないといみなされるのである。冒頭では、反抗的とされるコーデリアと違って、父リアにとって従順であるように見えたゴネリルやリーガンの饒舌な口は、後に、夫を抑え込み、主導権を握ろうとする権力への欲望を示し、この二人は男性にとって御し難い女性となる。沈黙したコーデリアも、口達者なゴネリルやリーガンも、父権制社会にとっては、男性優位の秩序を逆転させる脅威的な存在とみなされる。しかし、コーデリアの沈黙は、最後には、父親への深い愛情の証だったことが明らかになる。

16-17世紀父権制社会における女性の沈黙は、一義的なものではなく、多義的なものであり、その意味合いは、男性権威との関連で常に流動的なものである。男性にとって従順さの証とされた女性の沈黙は、女性にとっては、多弁になって話せば性的にも放縦と非難されるがゆえに、それを避けた自己主張するための手段ともなり得る。しかし、そうになると、女性の沈黙は強情や頑なさの印とされ、反抗的な態度とみなされる。コーデリアの沈黙には、当時の社会が抱える、女性の沈黙に対する矛盾が集約されているといえよう。そして、『リア王』という劇は、その矛盾に端を発した悲劇ともいえるだろう。コーデリアの沈黙を反抗的だと退けたリアが、終幕に、彼女の沈黙からが生きている証として言葉を聴き取ろうとするのは皮肉である。

女性の沈黙は、従順と反抗だけではなく、性的な魅力と結びつけられ誘惑とみなされることもある。このように、女性の美德とされる沈黙は、実際はさまざまな意味を示す曖昧なものであるといえる。その点において、貞節を保証しない饒舌な口と並んで、沈黙もまた、男性権威をゆるがしかねない脅威としてみなされていたといえるかもしれない。

参考文献

- Aughterson, Kate. ed. *Renaissance Woman : A Sourcebook : Constructions of Femininity in England*. London: Routledge, 1995.
- ed. *The English Renaissance: An Anthology of Sources and Documents*. London: Routledge, 1998.
- Boose, Lynda E. "Scolding Brides and Bridling Scolds: Taming the Woman's Unruly Member," *Shakespeare Quarterly*, 42 (1991), 179-213.
- Dusinberre, Juliet. *Shakespeare and the Nature of Women*. New York: St. Martin's Press, 1975; rept. 1996.
- Gouge, William. *Of Domestical Duties* (London:1622). Ed. and rev. Greg Fox. Edinburgh: Puritan

Reprints, 2006.

Habermann, Ina. *Staging Slander and Gender in Early Modern England*. Burlington: Ashgate, 2003.

Hamada, Ayano. *Women in the Days of Shakespeare and His Plays: Education, Eloquence and Marriage*. 神奈川大学大学院『言語と文化論集』特別号, 2006.

Henderson, Katherine Usher and Barbara F. McManus. *Half Humankind: Contexts and Texts of the Controversy about Women in England, 1540-1640*. Chicago: University of Illinois Press, 1985.

Jardine, Lisa. *Still Harping on Daughters: Women and Drama in the Age of Shakespeare*. Sussex: Harvest Press, 1983.

Luckyj, Christina. *A moving Rhetoricke : Gender and Silence in Early Modern England*. Manchester: Manchester University Press, 2002.

Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare*. Ed. G. Blakemore Evans. Boston: Houghton Mifflin Company, 1974.

---- *The Arden Shakespeare King Lear*. Ed. Kenneth Muir, London: Methuen, 1972; rept., Routledge, 1992.

Stallybrass, Peter. 'Patriarchal Territories: The Body Enclosed'. Ed. Margaret W. Ferguson, Maureen Quilligan, and Nancy J. Vickers. *Rewriting the Renaissance: The Discourses of Sexual Difference in Early Modern Europe*. Chicago: The University of Chicago Press, 1986, pp. 123-42.

Vives, Juan Luis. *The Education of A Christian Woman : A Sixteenth-Century Manual*. Ed. and trans. Charles Fantazzi. Chicago: The University of Chicago Press, 2000.

Warnicke, Retha M. *Women of the English Renaissance and Reformation*. Westport: Greenwood Press, 1983.

Woodbridge, Linda. *Women and the English Renaissance: Literature and the Nature of Womankind, 1540-1620*. Chicago: University of Illinois Press, 1984.

小林かおり、『じゃじゃ馬たちの文化史—シェイクスピア上演と女の表象』、南雲堂、2007年。

ハル、スーザン W.、『女は男に従うもの? : 近世イギリス女性の日常生活』、佐藤清隆・滝口春生・菅原秀二訳、刀水書房、2003年。